

2019. 12. 10 (木)

## 問いを立てるとのこと

古川 彰

はじめに

先日（2019年12月4日）、ペシャワール会代表で医師の中村哲さんがアフガンで銃撃され、なくなられました。悲しく残念でなりません。

中村さんは医療支援で現地に入られたのですが、乾いた土地に作物ができません、飢えていく人びとをみて、ここで本当に必要なことは何かという問い、医療は大切だけど、病気にかかるにはまずは生きなければならぬ、そのためにはパンが必要だ。パンのためには大地に水を与えて作物を作ることだと、問いに答えていきます。そして答えが出たらすぐに実践にかかります。中村哲医師と報道されるのは、用水工事の姿が強烈なので、医師がもとの姿なのだということも忘れないでという意図もあるのかもしれない。

医療から土木作業へというのは、大きな飛躍のように見えますが、中村哲医師にとってみればそれはひとつの問い、つまりここで暮らす人にとっては何が必要かという援助の基本に立ち返って立てられた問いへの、答えとしては同じ位相にあったわけです。

今日は、問いを立てるとのこと、問いを立てることを学生時代に学ぶことの大切さについて、すこし遠回りをしながら話したいと

思います。

どうして山に登るのか

私のはじめてチャペルで話しをさせてもらったのは2006年秋のことで、こんな風にして話しを始めています。「先日、関学の山岳部の中島健郎君という学生がヒマラヤ未踏峰パンバリ・ヒマールという7000メートル弱の山に初登頂して帰ってきました。ヒマラヤ初登頂メンバーになったのは、長い歴史をもっている関学の山岳部の歴史でもはじめてのことではないかと思います。」その後、中島さんは力をつけて翌年、山岳部の下級生であった山本大貴らとともにヒマラヤの未踏峰デインジュンリ（6,196 m）に登頂し、その後も目を見張るような登攀記録を作り続けています。

実は来年、関学山岳部は100周年を迎えます。OBの中島、山本という関学が生んだ世界的なクライマーとともに3年生の久保田凌平くんが、エベレストのすぐ近くにある7000メートル峰の難しい未踏ルートに挑みます。この山に向けて体力と技術を鍛えるために一年休学しようと思ったのも久保田くんにとって山に登ることが今を生きることの一部になっているからでしょう。今を生き

ることの一部というのは、山登りが何かの手段ではないということであるとともに、生きるとはなにかを問うことでもあるでしょう。

## 山を生きることと今を生きること

私自身も、大学の6年間は山岳部で山にばかり登っていました。1年をとおして山の楽しみは尽きません。4、5月は残雪の尾根歩き、夏はできるだけ深い山にはいって岩登りをしたあとたとえば黒部川の沢登り、秋は紅葉の藪山歩き、冬はスキーを履いて登ったり滑ったりのスキー山行、雪のたっぷり積もっている山にテントを持たずに出かけて雪洞を掘りながらの雪尾根縦走・・・、まだまだたくさんのパリエーションがあって面白いのです。

山は面白いけれど、もちろん危険です。山岳部時代の6年間でわたしは8人の仲間を失いました。クラブ活動で命を失うなんてなんと愚かなことだろうかと思われるかも知れません。でも私にとって山は遊びではなく、人生の選択、生き方の一つであり、学生時代を社会人になるまでのモラトリアムだという風には考えませんでした。学生時代をなにかの途中経過だと考えるならば、それまでの20年もまた経過に過ぎず、それを延長していけば働いているものなにかの途中経過、人生そのものがモラトリアムに過ぎないということになってしまいます。いまのその先にいつか何かの達成があるかのように考えることがモラトリアムです。では如何に。学生の4年間をモラトリアムと考えるのではなく、今しかできないことをすることに尽きるでしょう。

## パーティーシップと共同研究

山岳部の6年の間に私が学んだことは、天気図の書き方読み方、地図の読み方など、登山の技術、山での生活技術はもちろんのことだけれど、それよりなにより、山登りの実践を通してパーティーシップ、パーティーマネージメントを学ぶことができました。登る楽しみを実践するには、パーティーシップ、マネージメントがどうしても必要だったといってもいいかもしれません。パーティーシップというのは、リーダー、サブリーダーなどが固定したパーティーに指揮系統ではなくて、つねに全員がフレキシブルに行動することを可能にするための最終的な責任体系だと考えればいいでしょう。

たとえばパーティーシップというのは次のようなことです。数人でパーティーを組んで山に入って、テントサイトに到着したとき、テントをたてている人、食事の用意をするメンバーがいる、そのなかでわたしは何をすべきかを理解すること。誰かがケガをしたとき、他は何をすべきかを状況に応じて理解すること。つまり目的にむかって全体が動いていくように、パーティーでのそれぞれの役割を状況的に判断して行動するスキルと関係性をパーティーシップ、それをコントロールする技術がパーティーマネージメントと呼んでいいでしょう。そこには常に状況への問いがあります。その問いに答えようとするメンバーがいます。パーティーシップ、マネージメントというのは、状況を問いとして捉え、それを共に解くスキルであるとも言えます。そして、そのスキルは時間を経るに従って身体感覚へと昇華されていき、役割もパーティーシップも意識されないようになっていき

ます。

パーティーシップ、マネージメントのスキル（センス＝感覚と言ったほうがもいいかも知れませんが）は、その後のわたしの研究のほとんどが個人研究ではなく共同研究になったことにも、またその共同研究を遂行することにも大きな意味を持つことになりました。

### 未知への問いを共に問い続ける

中村哲さんが医師として入った現地で立てた問いの背景にあったのもこのセンスだったのでないか、そしてそれを実践するために

用土木へと身体を動かし続けられたのではないか、と思うのです。

みなさんが大学4年間で学ぶことは、高校までのように解がすでに用意された問題を独りだけで解くことではなく、共に問いをたてて、共にそれを解いていく楽しみを得ることだと思います。私もまた共同研究の楽しみ／共に登る楽しみ／そしてそれを実践していく楽しみ、ともに喜ぶたのしみを享受し続けてきたし、これからもそれを愉しんでいきたいとおもいます。

（社会学部教授）